

5. 学生グループ共同研究報告

インドネシアに学ぶ共生の在り方 ―現地フィールドワークを通して―

研究者代表：野原 早苗

共同研究者：西尾 和夏 加藤 真弥 金海 秀 石上 真衣 広田 千笑美
岩本 知夏 栗田 智子 伊藤 由果 近藤 瞭太

はじめに

1. インドネシアについて
2. 共生という視点でみるインドネシア
3. 共生のプロセス
4. 日本社会をふり返る

おわりに

はじめに

近年日本は観光の分野に重きを置いており、外国人観光客の数はますます増えつつある。加えて、労働力の確保などの視点から医療分野などで外国人労働者を受け入れようとする動きが活発である。そうして自分たちと違う言語・文化・宗教などをもつ人々との接点が増える一方で、日本人にはまだ排他的であったり、配慮が不十分であったりする面が存在する。異文化を持つ人々との共生について考えることは、これからの日本社会、ひいては国際社会における日本の存在において非常に重要である。

共生とは「相互関係をもちながら共に生きること」であり、私たちはインドネシアから共生についてのヒントを得ようと考えた。インドネシアは、非常に豊富な言語、豊富な民族、異なる宗教が存在している中で、「多様性の中の統一」を国是として掲げる国である。私たちは約4ヶ月に渡り、インドネシアの歴史や言語、民族、文化、社会状況などについて文献購読を行い、9月1日から8日まで8日間にわたり、農村でのホームステイやインドネシア教育大学の学生との交流、また首都ジャカルタと地方都市バンドン近郊の観光地をめぐる現地フィールドワークを実施した。それらの活動と、その後のゼミでのふり返りと議論を通じて、日本は共生の国インドネシアから、どのようなことを学べるのかを考察する。

1. インドネシアについて

1-1. 概要

インドネシアは約1万3千の島々（2010年8月現在）から成り、国土総面積は日本の5倍の191万平方キロメートルである。国土が東西に長いために、西部・中部・東部で時差が生じる。人口は2億4700万人（2012年現在）で、民族の数は300以上にのぼる。共通語はインドネシア語で、その他に700を超える地方語が存在する。政府は宗教を推奨し、無神論は許されていない。国是である「ビネガ・トゥンガル・イガ」とは「多様性の中の統一」の意で、

これは国章「ガルーダ・パンチャシラ」に描かれる鳥であるガルーダに明記されている（加納 2010：56, 80）。

1-2. 歴史

近代のインドネシア史は、被支配と独裁の歴史である。インドネシアは16世紀初頭から4世紀もの間オランダによって植民地支配を受け、第二次世界大戦中は日本軍によって政治を掌握されていた。終戦後、民族主義運動のリーダーであったハッタと後の初代大統領スカルノはインドネシアの独立を宣言、1950年にインドネシア共和国が成立した。

しかしながら、国土も散り散りで民族も様々であるインドネシアを一国としてまとめ導くことは容易ではなく、政治は混乱し経済も停滞した。そこでスカルノは、議会の解散や憲法の改訂を経て、翼賛的かつ集権的な政治体制である「指導される民主主義」を樹立する。だが、冷戦下での西側諸国との対立やそれに関係する外交の失敗などを繰り返し、国内経済は深刻なインフレに陥った。1965年には、9・30事件と呼ばれる政府の公式見解では共産党が起こしたとされるクーデターが起こり、スカルノは失脚した。

その後の社会的混乱を收拾した陸軍少将スハルトが第2代大統領となった。スハルトは西側諸国の投資と援助を受け入れる方針をとり、経済開発をおし進めた。その結果、1998年まで続くスハルト政権期において、インドネシアは1人当たりGDPが4倍以上の伸びを見せる経済成長を成し遂げた（片山・大西 2010：141-144）。

1-3. 宗教

インドネシアは憲法29条で信教の自由を保障しており、国教を定めていない。宗教分布は、イスラム教88%、キリスト教8%、ヒンズー教と仏教3%、その他1%（80年国勢調査）となっている（小川 1993：14）。非常に多くのイスラム教信者を抱えているインドネシアではイスラム法の概念である「ハラール（合法的なもの）」と「ハラーム（禁じられたもの）」とが深く根付いており、スーパーマーケットなどで売られている食品にはハラールであることの証明である「ハラールマーク」が貼られることが多い。その一方で国内にビールの製造会社（酒はハラームであるとされている）が存在し少量のアルコールを嗜む人もいる現状から、信仰の度合いは人それぞれであることが分かる。また最近では、イスラム教徒の女性が頭部を包み隠すためのジルバブがファッション化し、自主的に着用する女性が増加している（加納 2010：212-213）。

1-4. 社会文化

ここでは社会・文化状況について、食・料理、学校教育、観光の点から概略を述べる。

① 食、料理

インドネシア人の主食は米飯で、山盛りの米と少量のおかずで食べるのが一般的である。インドネシア料理として代表的なものは、スパイシーな炒めごはんのナシゴレン、ゆで野菜や揚げ豆腐をピーナツソースで和えたガドガド、肉の串焼きであるサテなどがある。一方、地域ごとの郷土料理が存在する。その中でもバリ料理には豚肉が多く用いられるが、これはバリではヒンズー教を信仰している人が多いためである（加納 2010：192-201）。

② 学校教育

インドネシアの学校教育には普通学校系統とイスラム学校系統があり、6-3-3制をとっている。高校生は必修として「宗教」の授業が週2時間設けられている。最近ではノンフォーマル制度といういわゆる飛び級のような新しい教育制度の影響から小学校・中学校の就学率も向上してきているが、地域差が大きいために、都市部と農村部では就学率の大きな隔たりが残る（村井・佐伯・村瀬 2013：152-155）。

③ 観光

1980年代に、インドネシアで観光が「もっとも重要な経済部門」となり、国内10ヶ所の観光重要地域が指定された。テロや天災などの影響もあったが、外国人観光客の数は年々増加傾向にあり、1980年から1990年の10年間では約50万人から210万人に増加した。近年では、同じムスリムでありハラールである食事を提供しやすいことから、イスラム教信者を多く抱えるアラブ諸国からの観光客が増えており、彼らによって地方都市における観光も注目されつつある（藤巻・江口編 2009：136-138）。

2. 共生という視点で見るインドネシア

2-1. 村の暮らし—西ジャワ州ワテスジャヤ村での経験から

私達は現地の実際の生活を体験しながらコミュニティにおける共生について見聞を深めるため、西ジャワ州ボゴール県ワテスジャヤ村で4日間のホームステイを経験した。ワテスジャヤ村は首都ジャカルタから車で50分ほどの距離にある山村で、付近では国内外の観光客を対象にしたリゾート開発が進んでいる。その村では約10年に渡り日本人ホームステイの取り組みが行われており、異邦人である私たちを温かく迎え入れてくれた。

想像とは違い、家電製品は日本と変わらず充実している家庭も多く、携帯電話を持っている子供さえいた。だが、高層ビルや派手な広告が立ち並ぶジャカルタのような都市部と比較すると、まだまだ生活水準に大きな差があるように感じられた。以下、私達がワテスジャヤ村でホームステイをした4日間の中で、実際に見た村の生活を振り返ってみる。

① 村の一日

村の一日の始まりはとても早く、午前4時ごろ村のモスクから流れる朝のお祈りである「アザーン」で起床し、午後11時ごろにはほとんどの村民が寝静まる。村には、お互いの隔たりがなく、他人と自分との境界線が薄いように感じられた。村民たちは、他人の家の前だろうと中だろうと自然に集まって、気付くと一緒にテレビを見たりご飯を食べたりしていて、私達にはどこまでがその家の家族なのか見分けがつかなかった。これは恐らくインドネシア人の性質「相互扶助」「フレンドリー」の表れだろう。

② 市場を訪れて

村に滞在中には、青年団の方とお母さん達に連れられて村から少し離れた市場を訪れた。その時、青年団の方からバッグは体の前で持つように注意された。スリに遭うのを防ぐためである。また、買い物を終えて小型乗り合いバスで村に戻る際、子どもが急に乗り込んで歌を歌い始めると、一人のお母さんがその子供にお金を与えていた。物乞いの子どもがいる光景と、村ののんびりした雰囲気との落差に驚いた。

③ 生活における宗教

インドネシアではイスラム教の教えが行き届いており、ワテスジャヤ村もその例外ではな

い。そのため、人々はよく助け合い、貧しい人には嫌な顔一つせず施しをする。日本であれば、多くの人が無視をして素通りし、気にも留めないだろう。しかし、イスラム教の考え方では、財産というものはすべてアッラーの恩寵によるものであるもので、それを貧しい人に施すのが「善行」となる。

④ 公用語の浸透

ワテスジャヤ村では、公用語であるインドネシア語のほかに村民同士は西ジャワで広く話されているスダ語を使用している。しかし、インドネシア語しか話せず周りの会話についていけないという男の子もいた。事前学習において、インドネシア語の定着とともに、地方語を持たない若い世代がジャカルタのような都市部中心に増えているということは学んだが、農村部においてその実態を目の当たりにするとは意外な出来事であった。

⑤ 村が直面する課題

村での滞在中、東南アジア最大のテーマパーク建設計画が進んでいるという話を聞いた。計画地域にはワテスジャヤも含まれており、計画が実行される場合には村の人々が立ち退かなければならない。村民の間でも賛否が分かれる問題であるが、これが今後この村の「共生」のあり方として、大きな課題となっていこうと感じた。

2-2. 観光—外国人向けの気配りに着目して

インドネシア滞在中には、首都ジャカルタや西ジャワの地方都市バンドン近郊の観光地を訪れた。外からの観光客に向けてどのようなアプローチを行っているのか、自身とは異なる立場にある人をどのように受け入れているのかといった点を意識しながら、まずは一観光客として体験したこと、感じたことを以下に述べたい。

① スカルノ・ハッタ国際空港にて

私たちが日本から到着した際に利用したスカルノ・ハッタ空港で外貨両替をしようとしたときのことである。2万円の日本円を渡したところ、本来の半額ほどの現地通貨（ルピア）しか渡されず、抗議するとしぶしぶといった様子で不足分を渡された。このように日本人が詐欺に遭うことは少なくなく、在インドネシア大使館のホームページでも注意喚起がなされている。

② ジャカルタ市内およびワテスジャヤ村周辺のレストランにて

インドネシアでは、用を足す際は基本的に紙を使用せず水洗いする。首都ジャカルタのレストランのトイレでは観光客用のトイレットペーパーが設置されていたが、地方都市ボゴールのレストランでは水がはられた桶とそこから水を汲むための手桶のみであった。また、ワテスジャヤ村のレストランではアラブ人観光客をよく目にした。理由は先述の通りであるが、現地の人はその経済効果のため彼らを歓迎しているとのことだった。

③ 独立記念塔モナスにて

歴史博物館を併設する観光名所の一つでもあるモナス（独立記念塔）は、首都ジャカルタの中心部に位置している。ここには、英語の説明文や中国語のパンフレットなどが置かれており、外国人観光客への配慮が見て取れた。また、モナスの周囲に広がる広場では観光客を目当てとする土産物売りをよく見かけ、こちらが日本人だと分かったのか簡単な日本語の単語で話しかけてくる者もいた。日頃より日本人を含めた外国人観光客が多く訪れているのだろうと感じた。

④ スンダの伝統芸能鑑賞にて

バンドン市内のウジョ竹楽器小屋にて「アンクルン」という楽器を用いたスンダの伝統芸能の鑑賞をした。その入場料は外国人料金を高く設定しており、パンフレットもインドネシア語のものと日本語のものを渡された。さらに、演目も伝統的な曲に止まらず「君の瞳に恋してる」などを現代楽器も交えアレンジして演奏するなど、外国人観光客を意識している様子が見て取れた。演目自体は楽しめるものであったが、こういった観光客へ対する配慮が伝統芸能に与える影響についても、考える余地があったと感じた。

インドネシアでは前章で述べたとおり観光化が推進されているが、その過程において引き起こされる問題について2点挙げておきたい。一つは、前節で触れたワテスジャヤ村と周辺のリゾート開発の関係にみられるように、観光の発展が排除される存在を生み出す可能性があることである。インドネシアは世界遺産遺跡があることでも有名だが、中でもボロブドゥールとプランバナン、ラトゥボゴ宮殿跡は遺跡公園として維持管理・運営が行われている。駐車場や売店、資料展示館までもが設置され二重のフェンスで囲まれたこの公園は、遺跡の保全保護と観光化を両立している。だが、元々ここにあった森林、生活していた人々など、この公園を整備するにあたって排除された存在があったのではないだろうか。ワテスジャヤ村での立ち退き問題のように、どのような場所でも「排除される」存在が生まれることは十分にありうるのである。

もう一つは、観光化と伝統の関係についてである。観光化を推進する上で、スンダの伝統芸能の変異や遺跡公園の例のように、本来の姿が変化したり、喪失したりすることはもはや避けられることではない。これはインドネシアだけではなく、グローバル化が進むすべての国々に言えることである。確かに、外部からの情報や技術の柔軟な取り込みは経済的にも有効であり、国の重要事項だ。しかし、それによって喪失の危機にさらされる「ローカル」の存在を忘れてはならない。インドネシアの多様性という特性を生かし、外部との良い付き合い方を模索していく必要性がある。

3. 共生のプロセス

前章ではフィールドワークで見聞したインドネシアの現状について述べたが、本章ではゼミおけるインドネシアから学ぶ共生の在り方についての事前調査と現地フィールドワークに対象を移し、私たちとフィールドの人々との間の共生を成立させるためにそれぞれの取り組みが担った役割について考察したい。

まず、事前に行った文献調査が私たちにもたらしたものは、円滑な現地での調査やコミュニケーションだった。また、国民国家の形成された背景や文化的意識などの情報を取り込むことで、東南アジア圏の一国であるという認識にすぎなかったインドネシアという国の輪郭を、ある程度くっきりと抽出することができた。調査以前にもっていたイメージの数々が修正され、同時に、「与えられたフィールド」という自分の外側にあった存在を、自分の内側に取り込むことに成功したのである。

次にフィールドワークでの体験から、共生の成立プロセスにおけるエッセンスを取り出してみる。私たちが訪れたワテスジャヤ村では、今でこそ積極的な日本人ホームステイの受け入れが行われているが、開始した当初は「こんな田舎に日本人が訪れて、何が楽しいのだろうか？何をすればよいのか？」という声が多く、受け入れを希望する家庭は少なかったようだ。部外

者の私たちからすれば、彼らのなんでもない日常を垣間見られることこそがホームステイの良さなのだが、彼らはその価値観に、ホームステイという他者を受け入れることによって気づいた。他人を受け入れることで、自らの中に自尊心を芽生えさせることができたのだ。

与えられる側、与える側、或いはマジョリティとマイノリティという立場の違いは、自らの優位、劣位を認識することで存在する。ワテスジャヤ村のホームステイ活動の変遷から。それらの立場を絶対的なものとして存在させることが相手を受け入れることへの躊躇を生むこと、また絶対的でなく時として与え、時として与えられるという流動的なものとして存在させることで、自らを受け入れ、ひいては相手を受け入れることができるようになることが言える。同時に、立場を格差として固定してしまうことが共生のための障害になりうることも改めて認識させられる。

村に滞在中には、村民と私たちの意思疎通は主にインドネシア語でなされた。指さし会話帳をよく使用した。私たちが疑問にぶつかった時、事あるごとにこれを開くことで、私たちと村の人はある認識を共有した。それは「わからない」という認識である。自分と相手のもつ常識の範囲が異なることをお互いに認めることが、他人と他人を、その関係性を維持したまま共生させるのである。

以上の事前調査からフィールドワークにいたる取り組みに関する考察から、共生は、自分と相手の違いを認めることで成立するとまとめられる。先入観や偏見は自分を相手に認めてもらうことにも、相手を認めることにも障害となる。目の前にいる「あなた」は私とは違う常識に育てられ、違う思考を巡らせているのだと第一に認識することで、お互いへの寛容さを持つことが出来、またこれは認められないなどという指摘もオープンに伝えられるのではないか。

4. 日本社会をふり返る

これまでインドネシアの現状とフィールドにおける現地の人との関わり合いについて述べてきた。それらを踏まえて、日本社会における共生のあり様をふり返り、日本社会における共生の実現のためには、それぞれの場でどのような変化や取り組みが求められるのかを考えてみたい。日本の地域社会、観光、スポーツを通じた国際交流という3つの場からそこにおける人と人との交流や共生のあり様をふり返ったが、ここではとくに観光について考えたことを述べていきたい。

日本を訪れる外国人観光客を増やすために、政府は旅行博出展、日本各地でのモニターツアーの実施とその招致活動、海外の教育機関に対する修学旅行、国際交流イベントの受け入れ、海外旅行会社エージェントに対して商談会の開催といった施策を展開している。

その甲斐あって、訪日外国人観光客の人数はビジットジャパン事業が開始された2003年度には521万1725人だったのが観光客数は、2013年度には1036万3904人と2倍に増加した(JNTO 2013)。だが、観光の現場では日本人に対する「礼儀正しい」「丁寧」といった外的イメージが先行し実際の対応との落差が生じたり、そういったイメージに気負いをして観光客に対して閉鎖的になる日本人も少なくない。また、ムスリムに対する食事や礼拝の配慮が不十分であるなど、マイノリティへの対応に関しても閉鎖的である。

外国人に対する「ホスピタリティ」として、日本社会は外国人観光客それぞれの生活習慣や行動のような内面性も受け入れる必要がある。それは旅行中であっても、彼らの日常行動

にあった選択ができるような環境づくりをすることである。その際には、「あなた（外国人観光客）を受け入れる体制が出来ている」という姿勢を見せていくべきであろう。日本の観光においては、日本らしい「和としてのおもてなし」からグローバル化に対応した「多様性に対するおもてなし」への転化が求められているのではないだろうか。

おわりに

以上、この報告ではインドネシアにおける体験を材料に、共生—相互関係をもちながら共に生きること—について考察を行ってきた。私たちは、事前にインドネシアという社会について学ぶこと、現地での滞在経験、そしてその経験をふり返り、さらには日本社会のあり様に目を向けてみることによって、共生の実現には以下のことが必要であると考えに至った。

まず、相互の歩みよりである。「他者に対して自分の価値観を強要しないこと」、そして「相手の価値観を受け入れる努力をすること」である。「郷に入っては郷に従え」ということわざがあるように、他者が自分のコミュニティ入ってきた時に、そこにおける最低限のルールを理解してもらう。さらにそれだけではなく、自分たちはそのルールを理解しようとする人々がいることを認識して、徐々に彼らが馴染んでいけるように環境を整えていく。そこで相互の信頼関係ができ、やがて「共生」が成立する。

だが、他者の価値観を受け入れることが出来ない場合もあるに違いない。むやみに自分の価値観の中にそれを押し込もうとした時、人々はそれに対して排他的になるのではないか。この状況に陥った時、「共生」は成立しないことが考えられる。これを防ぐために、自分という個の特性が失われない程度に他者から得た情報（価値観）を自分の中で工夫し、受け入れていくことが「共生」の成立につながるのではないか。

次に、この範囲内であれば、受け入れることが出来るという「自分自身の程度を意識すること」である。そのためには、私たち1人1人は多くの他者と関わりを持ち、他者から得る情報を時にはすべて受け入れ、時には排除し、またある時にはそれを新しい形にして自分の中に取り入れていく。試行錯誤を何度も繰り返しながら価値観や慣習という自分の中にあるものを認識していく。それが他者を受け入れる際の糧にもなっていくだろう。

以上のように、「相互の歩み寄り」と「自分自身の程度を意識すること」が日常生活における共生への第一歩となる。これらの行動を可能にする条件として、自分の意思が確立していることが挙げられるのではないか。「自分は〇〇である」という自分の意思、「あの人は〇〇である」という認識、これらの相互作用が現れた時に「共生」が成立すると私たちは考えている。

参考文献

- 加納啓良（2010）『インドネシア検定』（ASEAN 検定シリーズインドネシア検定公式テキスト）めこん
 片山裕・大西裕（2010）『アジアの政治経済・入門新版』有斐閣ブックス
 国際観光振興機構（JNTO）（2005）『訪日外国人旅行者満足度報告書』国際観光サービスセンター
 藤森正己・江口信清（2009）『グローバル化とアジアの観光』ナカニシヤ出版
 村井吉敬・佐伯奈津子・間瀬朋子編（2013）『現代インドネシアを知るための60章』明石書店